

江城年録一

元和十年<sup>甲子</sup> 三月晦日改元寛永元年

正月小

朔日<sup>丙辰</sup> 元三之規式

紀伊殿水戸殿西の丸<sup>江</sup>御出仕 かり装束 御くつをめさす

初献將軍様御盃紀伊殿拜受被成御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿拜受

御兩人御盃頂戴之時御服御拝領し●ら御加有之其盃御前<sup>江</sup>

上御盃松平伊予守頂戴御服御拝領御盃松平下野守頂戴夫<sup>と</sup>

通

二献御盃紀伊殿盃御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴松平伊予守通

る加へなし

三献御盃紀伊殿頂戴其盃水戸殿其盃松平伊予守それより

とおる加へなし

二日諸大名之御礼明六ツ半紀伊殿水戸殿御本丸<sup>江</sup>御出仕

かりの御装束 御くつめさす

御本丸 大御所様御盃紀伊殿頂戴御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴

水戸殿盃御前<sup>江</sup>上 御盃松平下野守頂戴夫<sup>と</sup>通御加有之

二献御盃紀伊殿頂戴 御前<sup>江</sup>上水戸殿頂戴御前<sup>江</sup>上御盃松

平下野守頂戴夫<sup>と</sup>をる

三献御盃紀伊殿頂戴其盃水戸殿盃松平伊豫守夫<sup>と</sup>通る

二献より御加無之

二日晩於西丸御謠初紀伊殿甲斐殿水戸殿暮六ツに 御出仕

●らの御服 御長袴をめさす

御座 御座敷へしきいのうちに紀伊殿甲斐殿水戸殿

初献御盃紀伊殿頂戴盃御前<sup>江</sup>上御盃甲斐殿頂戴御前<sup>江</sup>上

御盃水戸殿頂戴其盃とおる 御盃之時何も御加へ有之

二献御盃甲斐殿頂戴御前<sup>江</sup>上御盃紀伊殿頂戴 御前<sup>江</sup>上御

盃水戸殿頂戴夫<sup>と</sup>とおる御加へ無之

三献<sup>ふきの蓋</sup> 御盃紀伊殿頂戴甲斐殿水戸殿次紀伊殿進上

之臺にて御召上御盃紀伊殿とおる此次甲斐殿進上之臺に

て被召上御盃を甲斐殿紀伊殿水戸殿夫<sup>と</sup>とおる此次水戸

殿進上之臺にて御召上御盃水戸殿頂戴

三日 證人御目見

四日 代官衆御目見

五日 御茶湯初

六日 諸寺諸山の出家衆社家山伏御目見

七日 町人御目見御鉄炮初

十五日 尾張殿日光<sup>江</sup>御參詣之御暇

十七日 兩上様紅葉山<sup>江</sup>御參詣

十九日 堀因幡守御目付被仰付

廿日 御具足之御祝御連歌有之發句

はえあるや此神松の若みとわ 紹之

同日 安藤傳十小川新九郎岡野平兵衛御弓頭御鉄炮頭被仰

付

京極若狭守出仕 御臺様<sup>江</sup>初<sup>二</sup> 御目見越前綿三百把紅糸進

上 御臺様<sup>と</sup>金子千両拝領

廿三日 大御所様紀伊殿へ 御成

廿七日 將軍様紀伊殿へ 御成

二月六日 大御所様水戸殿へ御成御相伴<sup>八</sup>甲斐殿丹羽五郎左衛門

同十日 將軍様水戸殿へ御成御相伴<sup>八</sup>甲斐殿丹羽五郎左衛門

朽木卜齋

二月 京二條之御城御普請有之寅年

公方様御父子御上洛被成 天子行幸 可被成 御用意也就中

天座<sup>ハ</sup>金物も皆金銀<sup>二</sup>被 仰付奉行<sup>ハ</sup>中川半左衛門野々村

四郎右衛門柳原左衛門佐水野河内守等也

御使番衆より被仰付右之石垣請取大名役高<sup>者</sup>

本高之御禮等之 御文章 世千

五拾万二千五百石

尾張中納言殿

四拾五万五千石

紀伊中納言殿

七万石

松平隱岐守

廿五万石

井伊掃部頭

十五万石

本多美濃守

十二万石

松平下總守

十萬石

五万二千石

五万石

二万五千石

二万五千石

二万石

二万二千二百廿六石六斗

三万石

同廿日 將軍様松平陸奥守政宗宅<sup>江</sup>御成

同廿九日 公方様伊達正宗亭<sup>江</sup>御成

三月小

十五日 松平石見守一万人百石之御加増合二万石拝領

野州鳥山城<sup>江</sup>被仰付右おはりと申所<sup>二</sup>一萬石被申候鳥

山<sup>ハ</sup>右<sup>ニ</sup>淺田左馬助三万八千石<sup>二</sup>御座候上三河一萬八千石

石<sup>ハ</sup>上<sup>ル</sup>

尾張殿紀伊殿日光<sup>江</sup>御參詣

四月大

五日 將軍様松平下野守忠郷宅 御成

同十四日 大御所様松平下野守亭<sup>江</sup>御成御相伴水戸宰相殿

御座敷之荘

一茶入

一●さり乃間の床 一かけ物<sup>春雷</sup> 一わうさ盆

一●さりの間の床 古今 為相卿筆

一 一とうこの間の床 瀟湘夜雨の掛物<sup>敦漢筆</sup>

同十五日 安藤右京進為上使大坂<sup>江</sup>被遣大名衆永々之御普

請大儀<sup>二</sup>思召由 上意<sup>二</sup>時服等を被遣

同廿九日 板倉伊賀守勝重於京都死去<sup>八十</sup>

御本丸を 將軍様<sup>江</sup>被進 大御所様西丸<sup>二</sup>御隠居可被成由

にて西の丸御普請初 一本 大御所様御本丸<sup>江</sup>御移

將軍様<sup>ハ</sup>水戸殿御屋敷へ御移水戸殿<sup>ハ</sup>其間御暇<sup>二</sup>水戸<sup>江</sup>

御越

五月大六日越前仙千代殿越後高田<sup>江</sup> 御国替松平伊豫守越

前<sup>江</sup>高田より被移松平出羽守越前之大野<sup>江</sup>信州より所替

五万石 同大和守勝山 三万石 同土佐守 二万石

敦賀一郡京極若狭守拝領

六千三百石御加増<sup>六千三百石也</sup>

本多飛騨守

一 六月小 十六日之晚 於御本丸秋田長門守弓氣田七之助致喧嘩秋田を弓氣多討候て則切腹仕候依之 大御所様翌日十七日紅葉山江 御參詣無之

御文庫本作  
傳十部  
一 七月大十五日 將軍様増上寺江御參詣 女目安上り御取上無之  
安藤傳五郎御持弓頭被仰付太田喜太夫御免之跡  
廿日伊達政宗子息美作守を越前守ニ被仰付

去七月十三日福嶋左衛門大夫正則入道高齋於信州河中島次坂と云所ニ而卒去六拾四歳子息備後守四年以前ニ相果末子市之丞と申罷在而是父正則不和ニ而終ニ對面不申候由御知行二万石被召上市之丞ニ二千石被下江戸江相詰申候

御文庫本作  
三千石  
一 八月小 廿九日 將軍様于時水戸殿 馬數御座 松平伊豆守阿部豊後守御小姓頭並御近習衆之頭被仰付  
所替被仰付松平五郎大垣より小諸江移岡部内膳正丹波亀山より大垣ニ移御加増共二二万石

一 九月大六日 太閤秀吉公之大政所高臺院殿京ニ而御果七十六歳今迄之御知行三千石木下左近を養子ニ被成跡式を被下是木下宮内次男淡路守舍弟也高臺院へ東山ニ而五百石之寺領御朱印を被下

同八日弓同心鉄炮同心具足を着し鉄炮をうたせ弓を射させ御覽被成于時水戸殿馬數ニ 御成御座  
於御本丸秋田長門守跡役松平伊賀守被仰付組頭

一 十一月小 三日 大御所様西の丸ニ御移  
一 同十日 將軍様御本丸ニ御移 御臺様御輿入京より西の丸ニ御下向今日御祝言鷹司間白 信房公女

一 諸大名より御祝儀之御博着上  
一 同十三日 御祝之御能有之  
一 朝鮮王より 將軍様御代替之為御祝儀使者を進上申候十二月江戸へ可致到着之由

一 十二月小 四日 大御所様西の丸より御本丸江御成御相伴甲斐殿水戸殿於御座之間御祝之御盃之次第 初献之御盃 將軍様御頂戴其盃御前江上御盃甲斐殿御頂戴其盃水戸殿まいり  
おさまる

二 献 將軍様御始御盃 大御所様被召上御盃水戸殿頂戴其

盃甲斐殿まいりおさまる

三 献 大御所様 御始御盃 將軍様御頂戴御盃甲斐殿御頂戴其盃水戸殿まいり其御盃 將軍様被召上御銚子入七五

三 御膳すはり御引替常之御膳すわる  
御盃之次第初献二献有之 御めんんにてまいり御銚子入三献 大御所様御初御盃 將軍様御頂戴御盃甲斐殿頂戴御肴 將軍様江被進其盃水戸殿まいり其盃藤堂和泉守被下おさまる御祝過御勝手口より御數寄屋ニ御成御茶道

將軍様御參之次第  
大御所様上夫を 將軍様御頂戴夫を水戸殿御請取甲斐殿へ被進夫を水戸殿まいり夫を藤堂和泉守被下おさまる  
御數寄屋を出御被成御能御見物御能過還御

一 同十二日 朝鮮人下着到本誓寺御馳走人安藤右京進朝鮮人 江戶入 致管笠を旅宿之門前にてから鉄炮を 三つはなして 旅宿着申候

一 同十九日致登城 王使通政大夫鄭登副使、通訓大夫姜弘重從事官通訓大夫辛啓榮也 此時梅籠と云能書も来大將はきよく路●に乗り天かひをさらせ青地ニ龍虎の紋のつきたる旗をもたせ御門にて管弦をいたし登城す諸大名何茂装束にて登城唐人本誓寺より神田橋之御門に入竹橋之御門に入り西の丸へまはり登城

御臺様多門より密 御見物  
朝鮮王より進物  
一 御鷹 一 御馬二疋 一 虎皮十五枚  
一 豹皮十五枚 一 青皮十五枚 一 人參五十斤  
一 鮫百本 一 段子廿奏 一 油布廿端

三 使進上物  
一 虎皮廿枚 一 てるふ卅疋 一 花菫廿枚  
同廿三日朝鮮人御暇被下帰國

朝鮮國王李人たに全 奉書  
日本國王殿下  
上年馬島遠勞使价、越海修聘、良荷善意、就傳報、憑審賢王光●令緒、思篤前好鄰交之義、寔功●慶、茲遣

近臣●備賀儀、●修盛礼、土宜甚薄魂六幣、所冀益固

鴻基  
茂膺休祖、不宣  
天啓肆年捌月 日

朝鮮國王李 ●  
日本國源家光 奉復  
朝鮮國王殿下、  
維時臘天寒氣逼人、茲蒙一封書  
三官使之温諷一團和氣、恰如春風、中子幸統領日域、忽達

貴國、修礼致賀、若干珍産、●納感佩、繼前烈篤鄰交之良意、益切折慰、確約兩邦、流慶万代、●而勿間潤矣  
伏冀  
順時為  
國自愛、不宣

龍集甲子冬十二月 日  
日本國源家光

朝鮮國禮曹參判吳 百齡、奉書  
日本國執政倉閣下、  
●聞  
貴國

新王繼位、邦運重開、緬惟股肱大臣左右輔弼、奠鴻基於鞏固、綿福●於久遠、甚慶、我王殿下●審  
新王不愆●約、思繼前好、誠意拳々出於尋常、故差專使奉幣馳賀、兼答馮賀使之来

意、所以明累世之信、結

兩國之驩、使彼此億萬丞黎、咸固於安生樂業之中、休哉且聞本國人口、前日未及盡還、留在

貴境物尚多、懷土思鄉、人情所同、反其●髦古訓所許、更仰無遺刷、出付此使臣之歸、以修鄰好之義、不勝幸甚、不●副帖、聊表遠帆、曷足●儀、統希垂亮、不宣

天啓肆年捌月 日

朝鮮國禮曹參判吳 百齡

雅樂頭藤原忠世

大炊頭藤原利勝

阿波守藤原忠行 謹奉報章

讚岐守藤原忠勝

朝鮮國禮曹參判 磨下

珍染圭復多幸、吾 新大樹源君受大人父君禪、主日域宇内、國豊民樂、越三員 大官使捧

貴國王殿下詔書來 朝、修盛禮備賀儀、歎納無他、至 亦逐一有思賜、如副拈領之而進

以為榮、不変旧好、弥修隣盟者、此 彼之良策也、貴國人口、留在吾 邦者、先年依 懇求 普觸

域中刷還之、猶漏其綱者、更無望郷情也、不堪強還、是安生樂業之道也乞思慮焉、

風化都在 三官使歴覽餘蘊東高閣之仰冀能保 千鈞●永作万年計不悉

龍集甲子冬十二月 日

讚岐守藤原朝臣

阿波守藤原忠行

大炊頭藤原利勝

雅樂頭藤原忠世

日本國臣

寛永二年乙丑 正月大

正月朔日早天 公方様西之御丸江為御禮御成 明六ツ時分

尾張殿水戸殿御くつめきす御本丸<sup>二</sup>御出仕

公方様還御御待 還御以後御礼初

今日 嶋田清左衛門弟兵四郎諸大夫被仰付兄越前守弟

御盃之次第 彈正少弼

初献御盃尾張殿駿河殿水戸殿御頂戴何も盃御前<sup>江上</sup> 御盃

松平宮内少輔頂戴各御服御拝領

二献御盃駿河殿尾張殿御頂戴盃御前<sup>江上</sup>御盃水戸殿頂戴

盃松平宮内少輔被下納

三献御盃尾張殿頂戴其盃駿河殿其盃水戸殿其盃松平宮内

少輔松平出羽守松平右京本多中務松平石見守三献過<sup>而</sup>御

礼則御銚子之口<sup>二</sup>御盃すはり頂戴之時御服<sup>志し</sup> 拝領盃を持

退出

二日明六時分尾張殿水戸殿何<sup>茂</sup>御家門西之丸<sup>江</sup>御出仕

御盃之次第

初献御盃尾張殿水戸殿御頂戴盃御前<sup>江上</sup>御盃松平宮内少輔

頂戴被下納

二献<sup>香</sup>初献<sup>与</sup>同

三献目<sup>二</sup>松平出羽守松平右京本多中務松平石見守御礼御銚子

之口<sup>二</sup>御盃すはり以を頂戴仕盃を持退出

二口之晚御本丸御詔初暮六ツ之少前<sup>二</sup>尾張殿水戸殿御出仕

御家門御譜代衆着座之面々出仕

御盃之次第

初献御盃尾張殿駿河殿御頂戴其盃

御前<sup>江上</sup>御盃水戸殿頂戴盃とをる

二献御盃駿河殿頂戴其盃尾張殿其盃水戸殿一盃とをる

三献<sup>ふきの蓋</sup> 御盃尾張殿其盃駿河殿其盃水戸殿盃通<sup>ル</sup>

此次<sup>二</sup>別之臺出御<sup>三</sup>盃駿河殿御肴<sup>二</sup>被進盃とをる又別之臺出

御盃尾張殿御肴<sup>二</sup>被進盃とをる

三日 證人衆之御禮

四日 代官衆之御禮

五日 御茶之由初

六日 諸出家社家山伏之御礼

七日 町人之御礼

八日 西之丸様小石川筋板橋筋初御鷹野

廿日 御具足之御祝御連歌有

梅の香や千代萬世の松の風

御しのふる日の長閑なる空

野邊の雪高根の雪も今朝解て 御 其中

二月小 五日 大御所様駿河殿屋形<sup>江</sup> 御成去年より中納言殿

御成御殿御成御門結構<sup>二</sup>御普請被成江戸中無双之御門<sup>二</sup> 在々所々より見物上下群集

今日御相伴尾張殿水戸殿藤堂和泉守

御盃之次第

初献御盃左臺尾張中納言殿頂戴其盃

御前<sup>江上</sup>御盃駿河殿頂戴其盃御前<sup>江上</sup>御盃水戸殿頂戴納

二献御盃臺共<sup>二</sup>駿河殿頂戴其盃御前<sup>江上</sup>御盃尾張殿御

頂戴其盃水戸殿參納

三献御盃臺ながら尾張殿御頂戴其盃

御前<sup>江上</sup>御盃水戸殿御頂戴其盃 御前<sup>江上</sup>出御盃駿河殿御頂

戴納七五三御膳上則御引替し御膳出初献之常之御銚子<sup>二</sup>通

二献同前三献臺之御盃御前<sup>江上</sup>御盃尾張殿臺ながら御頂戴

盃御前<sup>江上</sup>御盃駿河殿御頂戴盃御前<sup>江上</sup>御盃水戸殿御頂戴

盃藤堂和泉守被召出納

二月十日小田原御城代近藤登之助石見守被仰付

同月大御番頭<sup>并</sup>足輕大將衆<sup>二</sup>馬乘同心十騎宛被仰付御知

行上総之内<sup>二</sup>二百石宛被下候是迄<sup>八</sup>步行同心計預申し候

松平出雲植村帯刀松平大隅牧野内匠安部撰津守松平豊前

守植村出羽以上七組計与力何も一所<sup>二</sup>知行被下此外残大番<sup>二</sup>

組本多備前守去々年相果其跡未頭不被仰付明組<sup>二</sup>頭無之阿

部左馬允義去年相果未其跡頭不被 仰付候間此二組今度与

力不被仰付後日進<sup>而</sup>頭被仰付候時分御訴訟申上候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>与力

被仰付候得共御知行其不被下御藏前<sup>二</sup>二百俵つ<sup>二</sup>被下候由

今度一所<sup>二</sup>御知行被下与力十騎宛被仰付候足輕頭<sup>八</sup>久世

三左衛門横田三郎兵衛嶋田右京

何<sup>茂</sup>上総<sup>二</sup>木曾殿上知行之内を被下

二月十三日將軍様駿河中納言殿<sup>江</sup>被成御相伴尾張殿水戸

殿進上物御太刀<sup>長</sup>御腰物<sup>那義弘</sup> 御脇指<sup>飯尾</sup> 紅糸<sup>百斤</sup> 白

糸<sup>百斤</sup> 金欄<sup>卅</sup> 繡珍<sup>二百</sup> 黄金<sup>三百枚</sup> 綿<sup>千把</sup> 御馬<sup>一疋</sup> 被下

御能組

難波 山科 大庄五郎 太左吉  
七大夫 小清次郎 笛市右衛門

敦盛 権右衛門 大庄次郎 笛市右衛門  
七大夫 大庄左衛門 大庄兵衛 笛庄兵衛

野々宮 権右衛門 小左衛門 笛市右衛門  
七大夫 大庄兵衛 大庄九郎 笛市右衛門

鐘馗 権右衛門 大庄九郎 笛市右衛門  
七大夫 大庄兵衛 大庄九郎 笛市右衛門

紅葉狩 山科 大庄九郎 笛市右衛門  
七大夫 大庄兵衛 大庄九郎 笛市右衛門

藤永 山科 大庄九郎 笛市右衛門  
七大夫 大庄兵衛 大庄九郎 笛市右衛門

祝言 弥次郎 小清次郎 笛又三郎  
親世 小清次郎 笛又三郎

藤永あいらへるへさき 権之丞 三番三 権之丞  
なく八はち 権之丞 らくあみ 弥太郎

うつぶさる 権之丞 いくみ 弥太郎  
すみぬり 大名さき 女弥太郎 弥太郎  
太即くわしや 権之丞

二月十八日 將軍様為御鷹野河越江御成  
同廿二日 河越近所 水尾野谷之養竹院と申寺古来之糸桜  
有高六丈四方八尺 花咲乱候間

公方様花御詠覽御酒宴有御供衆之内柳生但馬守詠歌有道  
春詩を作右之寺岩付先代之城主太田信濃守資家申物令建  
立百年以前繁昌之処書付寺領零落其形計残ス不慮

公方様御成不思議之次第と申候於養竹・御茶屋被 立御御茶之  
會有稲葉丹後守を御茶室之為亭主

廿四日 江戸江還御  
廿六日 將軍様尾張殿江御成供奉駿河殿水戸殿丹羽五郎左  
衛門也各夜之曙ニ於露地口御越

公方様被為成候を御待六半前ニ御成尾張殿駿河殿水戸殿  
五郎左衛門於露地之外口御出候祇候被成

御目見夫々内露地くらりのきわく伺公被成 御目見数寄屋  
入御之時水戸殿御京ニ復御直シ 將軍様掛物置合御上覽御座

御着被成御膳出御本膳御ニ之膳御肴尾張殿御給仕御中立  
御花 將軍様被成候

御茶之次第  
將軍様被召上尾張殿頂戴夫を駿河殿参夫を水戸殿参丹羽  
五郎左衛門給納後之御炭 將軍様被遊御炭過くさりの間江  
出御被成置合かさり 御上覽御長袴御召御成書院江 出

御 御廣間 御成御能初 三番過於御成書院御膳上初献二  
献者御手前ニ面あかり三献目ニ 相應院殿より上申御臺ニ面

公方様被召上其御盃尾張殿頂戴其盃 御前江上駿河殿頂戴  
其盃御前江上水戸殿頂戴其盃五郎左衛門被下納実御廣間  
江被成御能二番過其促還御尾張殿駿河殿水戸殿五郎左  
衛門外露地之戸口迄はし事にて御供尾張殿駿河殿水戸殿  
則御礼御登城

御数寄屋之かさり 御懸物 八んこ 御釜 かしはま  
たなに布袋のから箱羽はうき 御すみとり 手ふくへ 御花入 きねのをれ

御水さし 御茶入 こかたつけ  
はむ路ふんわんの盆 御茶碗 こよみの手 笛安所持  
なみたの茶杓 利休作 一 ふた置 ちくま

水こふしめんつう 右の御刀かけ御すきやの勝手  
御釧からり有 文殊院へ進上  
御数寄過くさりの間江御成

硯 織部所持 一 定家 御寶記  
龍のひつか 一 筆 くりくりの軸  
水入 一 からすみ

嘆鐘 同しもくの柱にかけて有  
御水さし ふうろなたに せいちの桶  
御茶入 大なすひ 袋なし

天目 一 はいかつけ  
たい 一 あまかさき  
茶杓 一 織部作  
ふた置 一 かやくろう

はさい 一 はちく  
ひさこ 一 八角のはけい  
御釜 一 そうくん入

つり 御くさりの間よりとうこの間御成  
とうこの間のかさり  
御掛物 遠浦の帛帆の絵

中央の卓にかねの物しらの香炉  
かまいと 紹翁之所持  
水さし いとのかしら  
茶入 中つき  
茶碗 あらき  
茶杓 利休作  
水こふし せいち  
ひさこ 同

とうこの間より御成書院江御成 御成書院のかさり  
上段のおし板の内 三幅一對墨絵  
中尊もつけないの布袋もんゑいけいの讀有  
左にたいけつもつけないの絵 自給自費  
右にちやうやう 讀同筆

中尊の前に中央の卓有はよくの上にてせいちのししの香炉  
同二重かふらの花入同らうそくて同香炉器たて  
左の對月のおにもんひのみなさきのみくわひん桑の  
しよくにのせて有

右ちやうやうの前に同前のくわひん花へ しん柳  
おし板の内かさり此分の  
御書院のわきに定家の古今上下奏重て有つり香炉つりて  
有

御書院なんとわきちやうひ棚のかさり  
ちうひたなの中の棚についし内の長ふんに千鳥の香炉香  
合きやうしこちに灰おし香器立て有  
左の一重ひきひき棚にゐんろう食籠くれなぬのあとか  
盆にのせて有

右の一重ひき棚にまき繪のちん開くれなぬのをむすひて  
有  
棚の下の下の中にあおかひの食籠盆に有  
上段の中にかさねたみ候置横に敷て有  
へりからをりかさねたみ候置横に敷て有

御しとねの左のわきになしちの御刀かけ有  
たいす まき繪

金のふる釜御道具いづれも御もん有  
御茶入くわひんくちのなすひ袋に入  
ようへんの天目たいにのせて有  
みこんの御いわの御みやけ物

中納言殿拝領

御太刀包次 一振 一御腰物大左文字 一腰  
御脇指大左もし 吉光 一腰 一呉服 二百  
虎皮 十枚 一豹皮 十枚  
銀子 三千枚  
又其所にて中納言殿より上  
御釵大左文字 一腰 一御脇指かなもり 政宗 一腰

御成書院かさり此分へ

上段おし板の内 三幅一対絹地墨絵  
中尊 観音  
左へ 龍  
右 虎  
中尊の前にをりしよく有  
しよくの中かねの香炉香炉の前についし内の香器先に  
香器灰ことうのくた耳のきやうしとちにたてら有  
両のわきたついのくわひんに花有両ながら

花の前 亀をふまへたる鶴のかねの火とづしきんのら  
うそく両か有  
以上  
おりしよくの上七ツかさりへ  
左右の掛物の前にかねの耳口の花入くわひんのしよくに  
のせて花有  
しん左梅 右竹  
おし板の内のかさり此分へ  
同御廣間書院床のかさり

中に石のけんひやう同前にかはら硯  
左にからねの馬の水入同水入の左にかねのからりやう  
のひつつ中に墨立懸て同左にそうけのえの小刀立かけて

同左にさやちくともにたいまひの筆たてかけて墨小刀ふ  
てみつひとのおさへにかねの物のさいの文鎮有  
ひつかの左に尊圓の手本ちくそうけ金すなこのひやうし  
くれなぬのひもとめそうけのさらの葉さしてくりくりの盆  
にのせて有

同硯の右にかねのけさんつまみ加に有  
けさんの右に三重の六角のかひの食籠ついでし内の丸き盆  
にのをて有  
書院の天井より八角のくはんしやうつりかけてしもくを  
左の柱にかけて有同右の柱にふり物の繪のふつす懸て有  
右御廣間書院のかさり此分へ

書院わき重ちかひ棚のかさり

中の棚にのせてそれを又ついでし内の盆にのせてあり  
左一重ひき棚に盆山菅の浮橋の石長盆にのせてすなまき  
てあり  
又一重ひきし右の棚に瀬戸の筒井肩付きんらんの袋に入  
てついでし内の盆にのせて有  
又一重ひきし右の棚に七つかうの食籠盆にのせて有  
棚の一下左にくりくりの食籠盆にのせて有食籠の右にせい  
ちのはちにせきしやう入ち有  
右書院のわき重ちかひたなのかさり此分へ

納戸わきのちかひたなのかさり

上の棚に青地のうかひ茶碗同臺ついでし内の盆にのせてあり  
同左のひきし棚に金のとうひんついでし内の盆にのせて有  
同右のひきし棚にからかねの鴨の香炉机にのせて有  
たなの一乃下の中からかね砂の物花入有  
右なんとのわきの棚のかさり此分へ  
御ちやうたいの障子たてし有くれなぬのあけまき有同ち  
やうたいの内のかさり中にたい有  
たいの中にけひきの袖有の具足甲有  
同左のわきになし地の長刀有  
右御ちやうたいのかさり此分へ

上段の中に重畳二帖横に敷て有但へり唐織 同赤地のらん  
けい御しとね縁同御しとねの左のわきになし地の御刀かけ

有  
上段下段のあひに御簾かけて有下段にも又重たみ二帖  
横に敷て有へりから織かさねたたみの上にきつかうのきん  
のしゆちんのおしとねへり同御しとねの左の脇になし地  
の御刀かけ有同かさねたたみの前より御車よせまで種々  
の進上の物積つつけて有

進上物  
一 呉服 二百 一 白糸 百斤  
一金欄 三拾奏 一 襦珍 百奏  
一 綿 千把 一 黄金 三百枚

以上  
下段の御次の間襖障子の左の角に右勝手に金の臺子ふち  
釜水さしひさこ立水こひかしふた置何て金なし地の臺子  
けんさんの天目のをて有御茶入大海たいすのわきに緒に  
仕候かうらいの糸茶碗有

御成書院より御廣間 御成之時御成書院の次にて中納言  
殿家老衆 御土産物被下候廣間之縁て太刀折紙呉服十脚札 竹腰山城  
呉服十 銀子三百枚呉服五太刀折紙三脚札 滝川豊前  
同 五 銀子百枚 同 渡邊平蔵  
同 同 同 同 安部河内  
同 同 同 同 寺尾左馬  
同 三 銀子五十枚太刀折紙呉服て御札 清水藏人  
同 同 同 同 兼松源兵衛  
同 同 同 同 市野辺出羽  
同 同 同 同 大道寺玄蕃  
同 同 同 同 遠山掃部  
同 同 同 同 津金三郎左衛門  
同 同 同 同 平岩弥右衛門同か  
同 同 同 同 長野数馬  
同 同 同 同 間宮権太夫  
同 同 同 同 成瀬平左衛門  
同 同 同 同 言殿御札

進上之物取入て後下段の襖障子たつる板縁にて中納言殿  
家老衆呉服太刀二冊御札

一 青のから立の御馬くれなゐの大ふさかけて梨地の鞍鏡つつ

ら切付虎皮のあをり指てとねり二人侍一人付て塀守門より御成門之外引出御車寄の前より諏訪部宗右衛門長袴にておる候玄関口より中納言殿内山下信濃長袴にて出御馬を庭引出諏訪部宗右衛門請取此時山下信濃守 白銀百枚拝領

其時御能初

一 加茂

進藤

大 庄次郎

太 左吉

七 忠度

権右衛門

大 庄次郎

笛 又二郎

七 熊野

春藤

大 源右衛門

笛 牛尾

一 三番過御中入被成舞臺江科足三百貫唐織之呉服二宛大夫

共被下脇より常々呉服段々被下御簾下扱御成書院

一 道成寺

進藤

大 植田

太 惣右衛門

七 道成寺

進藤

大 庄次郎

笛 長藏

七 道成寺

進藤

大 庄次郎

笛 牛尾

一 大坂御白に御普請去元和六年亥二月西國中国北國之大

名衆江仰付同年七月外曲輪櫓等御普請同年

御上洛二付假之御殿御立被成 還御之後仮之御殿を破二

之丸本丸之御普請大形出来去年安藤右京御上使被遣今年

御城大形出来申二付西之丸様より青山大藏 將軍様安藤

右京被仰付大坂罷上申候付大藏義兄伯耆守御勘氣之後

大手之御番被仰付相番之讃岐守二与力廿五騎御座候伯

耆守時之与力も同様に候得共御勘氣之時當番主と

皆致浪人其跡大藏被仰付候得共与力無御座同心計

家来之者を以大手之御番相勤申二付今度大坂二百日罷有

御普請御掃除萬事申付可罷在之間家来何茂召連罷上申付

大手之御番同心計差置申儀大切存候間先年伯耆守浪人之

節与力之内浅井半兵衛と申者御存知二被召出候間彼者久

敷大手之御番仕様子存候間同心等之下知をも仕留守中相

勤可申由大藏申上候二付浅井半兵衛被召出大手之御番仕候

伯耆守代二与力廿五騎大藏代二与力一人二相勤申付

半兵衛二三百石被下御加増共二五百石拝領仕候

御所様御進物尾張殿頂戴於書院御かけ盤にて御膳上初献

二献御めんめんのにてまいる三献之御盃尾張殿御頂戴之時御腰物御脇差を尾張殿御上被成候其御盃水戸殿御頂戴其

同十八日 碑文谷原 公方様御遊興

同晦日 公方様葛西 御成其日無双之大雁一羽 御鷹取候

参る右之雁之胸 文字之形四ツあり其文字ハ 〇●●●如此

文字有之誠に不思議成事成此文字讀申候者周御尋候得共

無之候

四月小 二日碑文谷原 公方様御遊興

渡辺山城守二条之定番被仰付知行七千石伏見定番衆之中

春日左衛門知行千七百石柘植三之丞三百石其外御藏奉行

二人伏見より二條 移春日左衛門 与力三十騎 同心無

之柘植三之丞ハ步行同心二十人預与力無し

嶋田治兵衛守右京若輩之時分致喧嘩越前浪人仕參罷

在候処今度越前ノ罷掃被召出鉄炮同心三十人御預被下難

有仕合也

四月當関白殿八條殿伏見殿門跡衆江戸下向

同八日江戸中屋敷改被仰付

同月公家衆西之丸 御目見之時大番衆安部撰津守組小

幡藤五郎申者三里ニ灸御座候 灸のふた仕候とて袴を

まいり居申候處ニ御横目石川八左衛門通り懸り見候 組

頭齊藤久右衛門ニ断候 藤五郎申分仕候得共不叶過錢

横目衆へ相渡申候然るに藤五郎灸仕候も必宣ニ御座候間

連々申わけ可仕候処達 上聞御本丸ニ之儀ニ候はさふと

の儀御免許可有候得共西之丸ニ慮外之儀御用捨難成

由 御意ニ五月廿七日小幡藤五郎切腹被仰付候初過錢

ニ相済可申処ニ進々穿鑿御座候其身切腹組頭齊藤久右

衛門ハ御改易被仰付

五月大 三日根来小才次松平縫殿助御歩行頭被仰付水野勘

屋敷明置候其屋敷被召上

同廿八日西之丸様藤堂和泉守宅江御成毎之通水戸殿駿河

殿供奉可被成處如何御座候哉 御相伴ニ御出なし和泉守

被下物

一 銀子五百枚 一 御帷子 五十 一 御腰物 簡次

今日節句ニ候得共御本丸江諸大名之出仕者無之由

西之丸様御成御座候によつて也

一 風呂之御茶湯 七五三之御振舞御能有之和泉守次男左兵衛

御目見御馬拝領

六月小 十七日南光坊大僧正御訴訟被申上候付北見半三郎

田中主殿御勘道御免許但

御前ニ者不召出直ニ將軍様江御附被成

大久保加賀守惣領之子千代被召出武州羽生ニ二万石

拝領是親父加賀守跡相統仕候得共先年祖父相州蒙御勘氣

候節依縁生令籠居罷在候今日御免許被成如此

六月十八日政宗子越前守忠宗初ニ仙臺 御暇被下從

西之丸様 御腰物致拝領

同廿八日 將軍様藤堂和泉守亭江御成御相伴駿河殿水戸

殿丹羽五郎左衛門也此衆昨廿七日御供ニ被召連參之由

御本丸ニ西之丸江御登城

銀子六千枚 御帷子 五十 御單物 御腰物 高木

安藤右京進御本丸御書院番頭被仰付

七月大 朔日田中主殿北見半三郎御本丸之御書院番江被入

青山伯耆守父子三人相州之知行所より遠州へ可參由從

大御所様御意ニ伯耆守子因幡守子弥八郎令同道遠州小

林村金藏居懇令之地千石被下

同十三日 公方様日光江御社參同十九日 還御

四月五月之中御社參可被成候處御眼病氣故御延引之由今

過半御本復乍去路次中御目醫者本党御供仕御葉を奉献上

同廿一日御眼病御快氣御目医者本党被召出

同廿六日井上外記大鉄炮を打赤坂ニ 千駄木林 廿

六町打

八月大 九日 大御所様大御臺様御本丸

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

三月大 八日 大御所様尾張殿江御成供奉水戸殿丹羽五郎左

衛門數寄屋ノ御作法如毎御茶過御成書院 出御殿

御成御教寄屋<sup>江</sup>之御相伴其駿河殿水戸殿從

大御所様御先<sup>江</sup>駿河殿水戸殿御本丸<sup>江</sup>御越御待夜之引明<sup>二</sup>

將軍様御迎<sup>二</sup>出御 大御所様明六時分御成 將軍様くろ

かね御門迄御迎<sup>二</sup>出御駿河殿水戸殿御玄關之白須迄御出

候<sup>而</sup>伺公御教寄屋<sup>江</sup>入御之時 大御所様御草履水戸殿御

なをし候はんと被成候得共駿河殿御時宣<sup>二</sup>御座候<sup>三</sup>付をそ

なはり雅樂頭直し被申候御膳之内御勝手口<sup>ノ</sup>藤堂和泉守

顔を出し申候御膳過御中立之時も水戸殿 大御所様御草

履御直し候はんと被成候得共駿河殿御先<sup>江</sup>御出候<sup>而</sup>御なを

し候御教寄屋御いなりにて御座候御教寄屋<sup>江</sup> 入御之時有

之御腰物持候人御草履をなをし申候

御茶之次第

御茶道 將軍様御茶之御給仕水戸殿被

大御所様<sup>江</sup>御上被成候又御給仕被成候半々水戸殿御立候得<sup>者</sup>

御直<sup>二</sup>將軍様<sup>江</sup>被進候則御頂戴●水戸殿御取次駿河殿

被進候駿河殿まいり夫を水戸殿まいりそれを和泉守にも

と御詫<sup>二</sup>而水戸殿まいり候を和泉守へ被遣候和泉守被下納

御花<sup>者</sup>

大御所様後<sup>者</sup>御炭も同御茶過御勝手口より御書院<sup>江</sup>出御

被成御能御見物五番過奥<sup>立</sup> 入御被成御簾中之御祝過<sup>而</sup>より

於御書院常之御膳上御相伴 將軍様駿河殿水戸殿

御盃之次第

初献二献迄御手前之御盃<sup>二</sup>而まいり三献御盃

大御所様御初御盃 將軍様御頂戴之時

大御所様より御腰物被進候其御盃

大御所様被召上御盃駿河殿御頂戴御看御拝領其盃

大御所様上り御盃水戸殿御頂戴御看御拝領其盃

大御所様被召上御納御銚子毎々にて又御盃出申候

大御所様御初御成候様にて御時宣色々御座候<sup>而</sup>

將軍様御始其御盃 大御所様御上り被成候時

將軍様より御腰物御進上被成候其御盃

將軍様御頂戴御盃駿河殿御頂戴御看御拝領其盃

將軍様<sup>江</sup>御上り御盃水戸殿御頂戴御看御拝領其盃

將軍様上候盃和泉守<sup>二</sup>被下納御菓子出と御面々菓子御持

候<sup>而</sup>御座敷御立被成御能御見物御能過候<sup>而</sup>駿河殿水戸殿

御同道被成御裏御門通西之丸<sup>江</sup>御礼御越候<sup>而</sup>御帰但水戸

殿御本丸<sup>江</sup>大手より御礼<sup>二</sup>御登城

同日阿部備中守大坂之御定番被仰付

今年紀伊国之浦々<sup>江</sup>鯨三百五十程寄申候由注進有

八月廿三日増上寺廓山上人死去之間京より了的上人被召下

九月小 十日一條殿江戶<sup>江</sup>御下向

同日 松平美作守於伊勢長嶋五千石拝領

同日 稻葉丹後守於下野佐野一万石御加増拝領

同日 酒井阿波守於上州板鼻二万石御加増拝領

同日 内藤伊賀守於常州真壁五千石拝領

十月大 十一日 駿河殿駿府<sup>江</sup>御入部之御暇被遂

同日 江戶御発足<sup>御參勤</sup>十二月廿七日

同日 公方様為御上使三浦志摩守參志摩守一文字

御腰物從駿河殿拝領

同日 藤堂和泉守被任侍從

同日 將軍様牟礼野<sup>二</sup>而御鹿狩有猪鹿御物数四十三御

自身御鉄炮<sup>二</sup>而猪鹿四<sup>ノ</sup>被遊御機嫌無比類及黄昏 還御

十一月小 朔日 昨日御留被成候御鹿皆御供衆<sup>二</sup>被下

同日 永井右近大夫死去

右自寛永元年至二年記以林大学頭写本補写

元治<sup>乙丑</sup> 度四月以楓山官庫本對校

奥村字 矢口浩

江城年録二

寛永三年<sup>丙寅</sup>

正月大

朔日御本丸御礼之次第紀伊殿水戸殿<sup>御かり御裝束</sup>御同道御

出仕御家門御譜代衆何も出仕御前御盃之次第初献御盃紀

伊殿頂戴其盃 御前<sup>江</sup>上御盃駿河殿頂戴其盃御前<sup>江</sup>上

御盃水戸殿頂戴其盃御前<sup>江</sup>上御盃駿河殿頂戴其盃御前<sup>江</sup>上

納

御盃頂戴之時何も御服拝領御盃之分には御加有之ニ献

御盃駿河殿頂戴其盃 御前<sup>江</sup>上御盃紀伊殿頂戴其盃

御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴其盃下野守殿<sup>二</sup>而納御加有之

三献御盃紀伊殿頂戴其盃駿河殿其盃水戸殿其盃下野守

二<sup>而</sup>盃納御加有之

三献過本多中務松平出羽守御礼申上別之御盃出兩人<sup>二</sup>

被下但兩人之盃御前へは上らず御盃之時<sup>者</sup>御加有之

二日御連枝御家門御譜代衆之面々西之丸へ御礼明六時紀

伊殿水戸殿御出仕<sup>御裝束</sup>御殿めさす

御盃之次第

初献御盃紀伊殿水戸殿頂戴其盃 御前<sup>江</sup>上御盃松平下

野守頂戴盃納御加有之

二献御盃紀伊殿頂戴其盃 御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴其盃

下野守被下納御加有之

三献御盃紀伊殿頂戴其盃 御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴其

盃御前<sup>江</sup>上松平下野守頂戴納

三献過別之御盃本多中務松平出羽守兩人之盃御前<sup>江</sup>は

上らず盃持退出

御盃之時計御加有之

同日之晩於御本丸御誦初御連枝御家門御譜代着座之

面々出仕紀伊殿水戸殿<sup>御報し</sup>御出仕

御盃之次第

初献御盃紀伊殿頂戴其盃御前<sup>江</sup>上御盃駿河殿頂戴

其盃 御前<sup>江</sup>上御盃水戸殿頂戴盃通

二献御盃駿河殿頂戴其盃紀伊殿其盃水戸殿盃とおる

三献<sup>ふきの蓋</sup> 御盃御ひかへの時觀世四海浪を謡其御盃

紀伊殿其盃駿河殿其盃水戸殿盃とおる

御三人御肴御拝受 紀伊殿御進上之臺之御盃紀伊殿頂

戴盃通 駿河殿御進上之臺之御盃駿河殿頂戴盃通

水戸殿御進上之臺之御盃水戸殿頂戴盃通

十日駿河宰相殿御暇被進先日光<sup>江</sup>御社參御國へ御座

廿日御具足之御祝御連歌

おは世に立まさる祈之とり哉 紹之

永きはかけを四方にしる ● 御 亥中

時津かせ浦の舟跡の長里にて

二月小六日將軍河越へ御成

同八日將軍河越すもの谷にて御鹿狩此時大番衆之中より七人かりの御使役仕還御之後本組 帰其衆矢部

藤九郎天野孫左衛門田中三太夫松井与兵衛神保三郎

兵衛岡野左衛門朝比奈勘右衛門等也

同十三日鴻の巢御鷹野御物數雁四十五羽

十八日同所御鷹野雁鴨百五十羽御者數有其後免符

有御機嫌能御こふしの雁鴨大御所様<sup>江</sup>御進上

廿四日江戸<sup>江</sup>還御御道中御馬早道にめす御供之面々<sup>京外</sup>つつき不申

二月廿七日 大御所様紀伊殿<sup>江</sup>御成<sup>御相伴</sup>水戸殿

三月小七日 將軍様紀伊殿<sup>御相伴</sup>江御成<sup>水戸殿</sup>

同十一日御役替被仰付

御歩行頭 大久保助左衛門 一 御横目 鶴殿新三郎

御持筒 中根傳七 一 教鉄炮 大久保新八

御小姓組之与頭 稻垣藤七 三枝宗四郎 松平志

磨守

小十人頭 岡野権左衛門 朝比奈勘衛門 神保三郎兵衛

等也

同日酒井讚岐守於武州忍二万石御加増被下

當夏 就ノ上洛於西丸道中宿割被仰付<sup>稻垣三四郎</sup>池田図書 日根

野長五郎等也

四月大 八日大風吹はより明迄大旱

大久保加平次小十頭被仰付

同日滝川與三右衛門御使番被仰付

飛騨国金森長門守<sup>二</sup>御預被成候上総介殿元和二年伊

勢浅妻より飛州へ御坐候<sup>而</sup>數年御坐候間上様御連枝<sup>二</sup>

御坐候<sup>二</sup>付<sup>而</sup>金森御馳走之上毎年鹿鶴其外鷹數多

進上申御鷹野切々被成御慰候間百姓共も迷惑し殊<sup>二</sup>去

々年より越州國替<sup>二</sup>付北國もさわかしく候間少御遠

慮も可被成処<sup>二</sup>毎之通<sup>而</sup>御座之間ヶ様之義達 上聞

大御所様々為御使者内藤外記 將軍より中山勘

解由を被遣金森今迄御馳走申上候義太儀<sup>二</sup>思召

由過分成 上意也扱又上総殿も信州へ奉<sup>木曾通</sup>迂

諏訪因幡守も御預被成上総殿御供之衆<sup>者</sup>柁木左京

千本掃部川村勘兵衛近藤十郎左右衛門等を初何も

妻子を引越参り四月廿四日諏訪へ御着

四月内藤紀伊守於大坂死去五十九

五月小七日日本多中書<sup>忠郷</sup>於播州死去無男子女子一

人有之<sup>姫君様之</sup>御殿 中書親父美濃守存命<sup>中書卿十五万石</sup>後<sup>金箱御受守</sup>

拜領 齊藤与三右衛門死去之後未跡役不被仰付候今度御

上洛之道中頭無之間中根傳七安藤傳十支配可仕之

由被仰付

六月廿日大御所様為御上洛江戸御発足

同廿八日 將軍様江戸御発足

御留守中 御本丸御番酒井備後守牧野内匠頭

中之口鳥居左京亮 一 奥<sup>并</sup>御臺所酒井備後守

梅林坂 坂部三十郎 西尾右京

御天主之下 はね橋御門も西尾右京

平川口水野左近 一 大手口 松平美作守

内桜田口も松平美作守 一 蓮池御門 土岐山城守

富士見下 鳥居左京亮 一 紅葉下御門 土岐山城守

御宮<sup>并</sup>山里<sup>并</sup>西之丸三大手 内藤左馬助

桜田口 酒井宮内少輔 一 糶町口酒井宮内少輔

但倉橋内匠加番

飯田町口戸澤右京 但菅沼藤十郎加番

橋之外之御番

木地橋 戸田藤五郎 一 清水門 内藤図書

本多丹下 竹橋 水野左近

鍋嶋屋敷之前 佐久間備前守

鍛冶橋 菅谷左衛門佐 一 <sup>から屋町橋</sup>大開喜左衛門

一ツ橋 近藤伊勢守 一 神田橋 堀淡路守

大橋 松平五郎 一 呉服橋 近藤百千代

わたくら橋 植物町橋 米津内藏助 一 まき町橋 千本忠三郎

以上

七月大十三日御入洛之由五月廿七日伏見へ御着

十四日 江戸雨降但京<sup>者</sup>不降 大御所様<sup>二</sup>一條之御城<sup>二</sup>

御坐 當將軍様淀之御城<sup>二</sup>御坐

七月之末より江戸御御臺様御病氣

七月廿八日大雨降江戸西の丸下北條出羽守宅火事出来

近隣曾我又左品川新六類火

當年之御城 御番衆水野備後守植村帶刀也

加番 松平主殿頭新庄駿河守等也

寛永三年

八月小八日御馬御覽

同九日御能有之 山科新藤開閣 もろこしたうたい

のしゅんしうはまつり事を天下に同とこしわか朝北

山の行幸は名を後代に傳へたりましてや今はとく

たへ厚き事重陽にさける菊の露津もつてかねて

幾よの測をあらはしせいみんのしけき事四ツの時

かすらぬ松の色ふかく猶も千年の秋のしる古今に

たくひるき君の代の目出度かりける時とかや

有事へ以来和尚禪室と可有と計<sup>二</sup>御訴訟す御免

なし

難波 新藤 大少二郎 笛 又三郎

田村 春藤 大長右衛門 大鼓 左吉

源氏供養 権右衛門 小又四郎 長 藏

紅葉かり 春藤 大長右衛門 小次郎 長 藏

道成寺 新藤 大長右衛門 小九郎兵衛 左 藏

三輪 春藤 大長右衛門 小九郎兵衛 又三郎

藤永 新藤 大長右衛門 小九郎兵衛 長 藏

熊坂 彦次郎 大長右衛門 小又四郎 新 助

狸々 新藤 大長右衛門 小又四郎 大 左吉



八月十九日大御所様江河野中納言齒頭中将為兩勅  
使太政大臣 御補任色々御辞退之由

將軍様八月十八日御参内

同廿日任官之衆大納言著駿河殿 尾張殿 紀伊殿

元中納言以上三人

中納言著水戸殿宰相 松平陸奥守 同薩摩守

加賀肥前守 以上四人

宰相著 松平伊予守元 松平宮内同 松平下野守

以上三人

中将著 森美作守元

少將著 松平長門守元 細川越中守同 京極若狭守

同 松平越前守同 上杵彈正忠同 松平新太郎

井伊掃部頭

侍従著 伊達遠江守四位 本多美濃守 松平下総守

四品著 松平右衛門佐 松平出羽守 酒井宮内少

同十九日諸大夫教多被任黒田甲斐守 同市正

御馳走衆之覺

禁中様 井伊掃部頭 小堀遠江守

板倉周防守 中村左右衛門

中宮様女中 酒井雅樂頭 間宮三郎六

女院様女中 土井大炊頭 藤川庄次郎

姫宮様女中 松平右衛門大夫 次田次郎太郎

禁中様女中 伊丹播磨守 角南主殿

撰家衆 本多美濃守 中坊左近

親王家 小笠原右近大夫 山田五郎兵衛

門跡衆 松平下総守 観音寺

松平河内守 新庄吉兵衛

松平式部

松平周防守 植村孫兵衛

松平越中守 松波五郎兵衛

岡部内膳正 高西夕雲

水野隼人

一 公家衆 松平越中守

松波五郎兵衛

一 地下御馳走之衆

一 戸田因幡守 丹羽式部少

一 萩原伯耆守 溝口伊豆守

一 長谷川式部 片桐主膳正

一 青木民部正 谷出羽守

一 御代官著 石河伊豆守

一 小野惣左衛門 吉川半兵衛

一 楽人御馳走之衆 根来右京

一 竹中筑後守 横山土佐守

一 花房弥左衛門 井上淡路守

一 御代官著 小川又左衛門 末吉弥左衛門

一 国持衆へ御馳走之衆

一 松平丹波守 水野日向守

一 戸田左門 菅沼織部正

一 同 下総守 本多伊勢守

一 御代官著 喜多見五郎左衛門

一 大名衆へ御馳走之衆 堀丹後守

一 保科肥後守 高力摂津守 脇坂淡路守

一 溝口伯耆守 佐久間大膳亮

一 御代官衆著 岡部将監 石原左衛門 山田長右衛門

一 猿楽衆御膳部頭衆御道具頭衆之馳走

一 御代官 小川甚左衛門 平野藤次郎

一 同七月より江戸ニ而大御臺様以外御煩重く被成御

座ニ付而京都申参道三品乗物ニ而下向仕候得著九

一 月九日於箱根息をさり相果申候五十九

一 駿河大納言殿も御臺様御急病之内被開召九月六十二日

一 晩京を御立被成道中御供衆つかずして矢崎次郎へ

一 青木勝七郎と申者小十人衆ニ而達しにて御供申御鎗

一 持一人上下共四人ニ而同十五日江戸御城へ御着被成候

一 得著一時はとさきに御臺様御他界被成候御残念無

一 申計 九月十八日伏見御立二条 御入直 江戸へ御立

一 十月大九日將軍様江戸へ還御同廿一日大所様還御九月

一 十八日伏見御立十月廿二日御帰城八日

一 御臺様御葬礼於麻生臺結構之御用意

一 同十八日御たきあり御ひや金銀にて粧り柱へきんら

一 んにて包六地藏の堂六ッあり堂弥はん堂幕へ皆白さ

一 や水ひきへ皆帯へ恐のねり数千の燈籠もよきのはやを

一 以張金銀にて粧り諸寺諸山之出家参詣す導師著増

一 上寺之住持了和和尚也

一 同廿二日より廿六日迄諸国之出家悉増上寺へ経を納

一 誦經に参詣す各被下御布施を其申に武州池上本門

一 寺之住持寺日寿并中山之日鑿御布施を不請申候間同

一 宗身延の日乾同日遠へ御布施を受候間これより宗

一 論公事起り申候

一 同月松平大隅守牧野内匠頭兩人ニ御留守居役被仰

一 付大番之時御預之十騎之與力五十人之同心一同召連

一 参御留守居可仕由被仰付則大隅守へ播州姫君様へ御迎

一 可罷上之由被仰付也

一 同十一月大京都ニて中宮様王子御平産同廿五日親王の

一 宣下高仁之由申来親王

一 江戸御城御奉公の御帳ニ付申事御中陰の間へ無之

一 同十二月小大御臺様御墓へ一品の御贈位有

一 勅使著五條少納言為適下向アリ崇源院殿一位昌

一 譽大夫人と申候

一 同廿日播州の姫君様御下着南の丸へ御移之道中へ松

一 平大隅守御供申令下向天寿院殿是也

一 寛永四年丁卯 正月大

一 正月朔日明六ッ時公方様為御礼西の丸へ御成

一 朔日御家門御出仕御譜代衆各御礼

一 御本丸御前御盃之次第

一 初献之御盃駿河殿頂戴其盃御前へ上御盃水戸殿頂

一 戴盃納御服拝領したり

一 二献御盃水戸殿頂戴其盃御前へ上御盃駿河殿頂戴

一 盃納

一 三献御盃駿河殿頂戴其盃水戸殿盃納御盃之時御加有

一 之



御盃之次第

初献二献<sup>者</sup>御手前之御盃にてまわる

三献之御盃駿河殿御頂戴其盃 御前へ上御盃水戸殿

御頂戴其盃御前<sup>上</sup>上藤堂和泉守被下納御能過還

御 三日公方様節句之為御礼西の丸<sup>江</sup>御成還御之後御本丸之

御礼初

四日於西の丸禪宗之法回御聴聞有之

當春より江戸方々之町<sup>ニ</sup>切々火事有之

三月八日之夜四ツ時分山の手貝塚<sup>ニ</sup>居申候大番衆米倉

傳五郎と申者<sup>ニ</sup>意趣御座候て奥津七郎右衛門と申者

押込打果し申候内田五郎右衛門奥山七之助恵波茂左

衛門と申者右之喧嘩之人数<sup>ニ</sup>跡より追かけ大勢にて

參候間傳五郎も牢人など召連切て出夜通切合両方

手負数多有之五郎右衛門七之助<sup>ハ</sup>其場にてうたれ

茂左衛門は翌日致切腹候相手傳五郎方にも手御死人

数多有之傳五郎<sup>ハ</sup>手負候得共無相違罷退申候前代

未聞之大喧嘩なり

三月九日 將軍様駿河殿<sup>江</sup>御成御相伴尾張殿水戸殿

立花飛騨守也尾張殿水戸殿早天横雲引申候時分御

数寄屋之勝手迄被越 將軍様之御成を御待 將軍様

被為成候と駿河殿<sup>道</sup>まで御迎に御出尾張殿水戸殿

<sup>ハ</sup>捨露地の外迄御出候 何公数寄屋へ入御之時御伴

御草履飛騨守なおす御中立之時<sup>ハ</sup>尾張殿御なをし候

入御之時<sup>ハ</sup>御草履水戸殿御なをし御茶之次第 將軍

様被召上駿河殿御頂戴それを尾張殿まいりそれを水

戸殿へまいり飛騨守被下納御茶碗は飛騨守持駿河

殿へ進申候御茶入御一覽之次第も同前御花後之炭將

軍様被遊候さて勝手へ出御有駿河殿御寢所<sup>ニ</sup>て御

うす茶あかる内尾張殿水戸殿藤堂和泉守土井大炊

頭をめし候て御咄有之御能之御支度御座候との御披露

を裏へ出御有御能を御見物五番過御膳上御盃之次第

を初献二献迄 御手前手前之御盃にてあかり三献御

盃出 將軍様被召上御盃尾張殿御頂戴其御盃御前<sup>上</sup>

御盃駿河殿御頂戴其盃御前へ上御盃水戸殿御頂戴其盃

御前へ上御盃藤堂和泉守<sup>ニ</sup>被下納還御

面々両御城<sup>ニ</sup>何も御礼<sup>ニ</sup>登城

三月十四日国替被付候衆

會津へ<sup>四万石</sup>伊与松山<sup>ノ</sup>

白川<sup>十石</sup>

三春<sup>三万石</sup>

二本松<sup>三万石</sup>

伊豫松山<sup>上ノ山</sup>

羽州上ノ山<sup>二万石</sup>

野州鳥山<sup>二万石</sup>

卯月六八日之夜江戸愛宕山之宮炎上一宇も不残此

社<sup>者</sup> 権現様濱松<sup>ニ</sup>御座候御時遠州なるこ坂と申所<sup>ニ</sup>

愛宕の宮あり彼別當金剛院と申御家中之面々折念

なと頼申候真言の僧あり 権現様駿府へ御移之時

諸旦那<sup>ニ</sup>付駿州<sup>ニ</sup>来愛宕の宮をも駿州<sup>ニ</sup>移申候間

<sup>ニ</sup>又関東御入国以後諸旦那を追候て當所<sup>ニ</sup>下愛宕之

宮を當所<sup>ニ</sup>遷し禍<sup>ハ</sup>わすかの小社なりしを御城御局

民部卿崇敬あり公儀之御祈祷所となり此火事以

後御造営有之

五月小三日 大御所様尾張殿へ御成御相伴<sup>ハ</sup>水戸殿

立花飛騨守也

河越仙波之南光坊僧正海當春中<sup>ノ</sup>藤堂和泉守

高來に相談ありて江戸御城の良忍の岡に一山を建

立し 権現様之御社を致建立江戸之鎮守の社にと

令念願其由致言上候得<sup>者</sup>可然由御免許御坐候<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>

則和泉守御社を達建立尾張殿紀伊殿水戸殿各堂

一社<sup>ツ</sup>御造営有之

五月十四日 大御所様水戸殿へ御成御相伴尾張殿立

花飛騨守夜之引明に水戸殿御迎<sup>ニ</sup>御登城

相国様被為成候時水戸殿外露地に何公御成被遊候と

水戸殿くくりの戸をあけ御先へ御むいりふるの炭御直

候<sup>而</sup>御膳御出し候御本膳御二の御膳水戸殿御給仕御銚

子義候<sup>而</sup>御肴兩度水戸殿御持參御膳すへり候時<sup>一</sup>二

之御膳水戸殿御上候御中立御花相国様被遊

御掛物<sup>しむんせき</sup> 一 御茶入<sup>ふんりん</sup>

御釜<sup>はむう</sup>

御茶碗

御茶之次第

御茶入<sup>かぬ</sup>

御水さし

御花入

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

御茶之次第

御盃之次第

御茶碗

へ被仰付

板倉周防守近日致帰洛候に付而七月十三日於西丸被下  
御暇京都之条々被仰付就中諸家之僧徒出世之儀被仰  
渡

一 九月大朔日上野 権現様神殿之御普請出来則山号

を東叡山と号し寺号者寛永寺也同十七日御遷宮

一 常行堂 尾張大納言殿

一 法華堂 紀伊大納言殿

此二之堂之間にそり橋有此堂之内に摩多羅神

あり

御本社并拜殿御供所

一 經堂 水戸中納言殿

一 二王門 永井信濃守

一 石佛并文殊堂 堀 丹後守

一 鐘樓堂并塔 土井大炊守

諸大名より石燈爐寄進

一 七月十七日去年大坂御番相勤罷帰今日御目見

水野備後 植村帶刀

松平主殿 新庄駿河

一 九月晦日横山町邊の寺町より火事出来折節大風

吹日夜三日不消町四十町目と焼吉原辺迄焼男女數

多焼死

一 十一月大十四日酒井備後守忠利法号建康泰雲死去

於河越葬礼足利之寒松哀悼詩

維持寛永四稔歲次丁卯仲冬十有四日酒井氏備州

刺夫奄然遊戯朝峯一路訃音聞洙泗之陋菴於

是不勝嘆息追討之餘聊贈一篇之伽陀以擬一鉢

之樂樓云

期 正合保殘涯 不意今朝聞訃嗟

七十年光利那頃 一声横笛落梅花

丁卯之冬酒井備後太守嬰有病更醫方方無驗十一月十四

日遂指館舍嗚呼惜哉太守平成事上則如魚之有水

撫下則如乳之哺兒臨軍則如虎熊之于郊守城則如龜

玉之不毀於●誠政道輔佐國家之信頼者宇於是舉

世無不痛惜焉太守知余有年矣不可無●詞以獻之時

聞有老衲賦一偈而悼之余偶記其韻以和之綴二首而

奉吊慰之其一則姑放方外體以太守菅墓洞之禪故

也其一則聊抒下情而奉助令嗣讚州公之餘哀去

尔

元是無生豈有涯 人惜且做世間嗟

雷搖鉄樹三冬暖 不待東風入百花

先考遠登天一涯 夢中猶見足歎嗟

孝心永使本根在 子子生枝歲々花

同日根来小才次右預申候御歩行衆二組被成増人

を抱大番之組頭より久保平左衛門兼松弥左衛門

二人御歩行頭被仰付

同日佐渡之御代官鎮目市左衛門相果申候間其跡へ

駒井右京進被仰付

十二月小廿六日秋山修理亮宮木越前守井上筑後守豊

嶋刑部少輔諸大夫被仰付

板倉周防守に於西丸被仰渡諸宗出世之上意

諸宗出世之儀故相国様御法度出に相背漫に有之由被

聞合候間三條中院を以窺 叡慮御法度以後出世之者

先相押其上重 器量を御吟味被成可被仰付候事付

諸宗出世之前後御法度出に相違候者出世之儀望申候

はば向後執奏之様三條中院と相談可申渡事

五山紫衣黄衣西堂之公伏頂戴不申故も御法度書以

前御赦免之事

一 知恩院執奏之上人号之事背御法度出に背漫に上人に

被成候者押置右如被仰遣候御吟味之上重而被仰付候事

百万遍淨花院黒谷より執奏之者も増上寺其談儀所に

能化両利之添状を知恩院へ持參申右之小本寺へも知

恩院より申遣可致出世事

寛永四年七月十九日

鍋島信濃守領分肥前国佐賀之高傳寺之隱居不鉄と

申禅僧禁中并江戸へ參御訴訟之事あり是へ曹洞宗に

紫衣御免被成可被下由御訴訟申上候今程五山大徳寺妙

心寺に紫衣御免近代者浄土宗にも紫衣御免候得共

洞家者出世仕候得共能登の總持寺計紫衣御免其外

へ御法度にて皆黄衣計着用仕候元和元年以前へ本

寺十ヶ所計紫衣着用之由及承以目安申上其目安日

曹洞宗傳日域之周由道元和尚者村上天皇九代之苗

裔十三歳而登台嶺出家十八歳之内有聞一切經二編

經中有疑問不得決之三井寺公胤僧正依指南而入於

洛陽建仁寺荣西和尚室而極顯密二宗開臨濟宗風

貞應二年亦荣西和尚指南令入唐矣於天童山傳洞家

法安貞年中帰朝矣於越前志北庄建立永平寺而山居

洞家権興也其頃道春價声無障ヲ扶桑

後嵯峨院賜紫衣深辞治不受再三仍勅意重而頂戴

有頌曰

吉祥山難淺 勅命深重々

還被笑猿鶴 紫衣一老翁

難然寵秘無着用五傳跡開關能登之總持寺為出世

地復三十年後永平寺依為洞家濫觴被下應安年

中御編旨為出世之地其後度々炎燒難紛失之入夫

焉瘦哉有口碑不朽豈虚誕耶預道元誓示云當山

尽未來際可為山居難蒙國王之宣命誓不出當山莫

人城湏聚洛住京洛則佛戒可緩佛戒終則三宝輕三宝

輕則佛法零落亦後代兒孫於當山披紫衣黄衣莫作

出世事以茲至迄三代如遺戒也至四傳五傳之時

後醍醐御宇勅テ總持開山瑩山和尚十問十答有之時

又特賜三光國師号為勅願所被定出世之道場也

龜山法皇先院宣曰

能州鳳氣至郡 諸嶽山總持寺 住持職之事

右編傳鸞嶺正脉直医曹洞勝躡祖位濟瑞電宗綱振

天下已恢弘祖道蓋峯揚佛法呼聊少林之芬芳一花五

葉鎮祝皇圖長處万春千秋者院宣如件悉知之

正午九年三月二日 奉三品大納言行房判

後醍醐天皇編旨云

能州諸嶽山總持寺正運廓開之嘉城北州單得淨場也

修宇紀叡情儀或超祖跡千相並寺禪第一之上利着紫衣

法服之御衣嘉奉祈聖躬億兆之宝位

元弘四年八月廿八日 經作判

右御編旨者為後來總持之修宇叡情如斯相並南禪寺

披相定紫衣瑞世道場自尔總持寺之出世如勅許也  
然元和元年曹洞紫衣出世御穿鑿之節審細依不申  
達兩本寺之外一圓被停止剩上人号之御編旨吾門非  
先例者宇

仍訴訟

曹洞一宗者難為末世伏上古之佛制不誇於形勢名利  
不好猶文学才智学拾薪設食先律勤頭陀忍辱難行  
朝鍛夕鍊勵志求心一旦領旨轉凡入普而經廿年極一  
會之首項其後尋嗣奉仕傳授宗旨命脉而為長老称  
之和尚号之知識是佛聽許之位也於其上出世者轉衣一  
儀又望紫衣取希大和尚之位也 後醍醐以来曹洞之  
出世如斯之或也于然至枝派葉派之徒猥着朝衣者益  
街溢衢依之乱着用之御制禁者理曲不断難然今也於東  
西国曹洞家為其長古刹僅不過十ヶ余寺奥被任先勅  
之旧例 伏乞御免許於諸末寺者如先規總持寺住持之印  
編旨仰望憐察

寛永四日 孟冬日

右之以目安京都江戸へ参言上仕問国師并呈判之學  
校<sup>二</sup>被仰付禁中有識方へも御尋御吟味御座候処近代  
洞家之僧徒一向学問をいたさす文旨にして理非を不  
知其内に<sup>著</sup>か様之儀存寄之上寄特なり然共不案内<sup>二</sup>  
<sup>三</sup>文盲成之上様や夫五山大徳妙心の出世とは京都  
勅願寺之本山あり學問成就し後本山<sup>二</sup>上り住持職を  
遂候之時勅使を取立勅特諡之禪師号之時紫衣を必御  
免許也調家に<sup>著</sup>京に本山なり賜紫衣例なし北東に  
本寺ありて後醍醐之御時紫衣御免之由難申傳其後  
退轉と見へたり相統之勅出之例もなし代々之住持  
五山大徳妙心の如くの勅特諡禪師号を或賜或不賜  
して紫衣御免之理無謂其上勘文之写年号相違な  
り龜山院之所字之年号文應弘長文永計也正午  
九年へ数十年之後南朝の年号也後醍醐之御時元  
弘之年号ありといへとも四年之勅出不審也若亦南  
朝後龜山之事を誤て北朝之編旨と存申に也能登  
を前へ南朝之領国なれも大形南朝之事なるへし  
是へ北朝に<sup>著</sup>一向不用之程<sup>然</sup>先例に<sup>著</sup>難叶殊<sup>二</sup>南

禪寺<sup>二</sup>相並紫衣御免許之由偽之南禪寺へ遙<sup>二</sup>後之  
事也但編旨<sup>二</sup>控上人御坊と有事へ以来和尚禪室  
と可有と計にて御訴訟御免なし